

祝 辞

「生物・環境工学と農学は安心して21世紀を迎えられるのか」

農学生命科学研究科長、農学部長 林 良博

8年前に農学部は危機に立たされていた。

文部省はある時はやんわりと、ある時は明確に、農業工学科は工学部へ、農業経済学科は経済学部へ移ったほうがよいのではないかと我々に迫っていた。また日本には農学部が多すぎるのではないかととも言われた。内憂外患とでもいえばよいのだろうか、文部省やマスコミだけでなく、駒場の学生たちも私たち農学を見放したかのように進学してこない。

しかしよく考えてみると悪い材料だけではない。もし農業工学の先生方が工学部に移ったほうが有利だと判断したなら、もっと直接的な言い方をすれば、沈みつつある泥船である農学を棄てて工学に乗り移ったほうがよいと農業工学者が考えていたならば、農学部はとうの昔に四分五裂していたであろう。しかし農学部の先生方は、農学を守ろうとしていた。それは弱いものを見捨てておけないという「武士の情け」か、それとも必ずや近い将来農学に日が当たるという「直感」だったのか、私は知らない。

また、たしかに駒場の学生の進学率は低かった。しかし進学してきた学生たちの農学部に対する評価はけっして低いものではなかった。さらに大学院の定員充足率は、他の研究科と比較して高いものであった。このことは、農学というのはミーハー的な人気はないが、玄人には評価されていることを示唆していると私は感じた。

その後の経過は多くの人人が知っているとおりである。いまや農学は工学よりも駒場からの進学率が高い。文部省やマスコミから農学を減らせという注文はこない。国民の多くは、農学に暖かい風を送ってくれているように思える。

いま私たちは、こうした順風に甘えていてよいのだろうか。世の中が開発指向から持続指向へと移り、脱工業化社会などとマスコミが声を大きくする中で、かつての農学と同様の悲哀を味わっている工学が、着々と次世代の準備を進めている。工学は農学にくらべて、遥かに「したたか」で「しなやか」な科学といえる。

私が生物・環境工学に期待したいことは、工学的な「したたかさ」と「しなやかさ」をもつ農業工学の魂をもって、農学をリードしながら21世紀を迎える準備をしていただきたいということである。